

第四章 尾津野家にて

1.

この日も一日、朝から晩まで大変な目が続いた。

何はともあれ、この子連れて家まで帰らなければならない。何者かはさっぱり分からないが、見つけたからにはこんなところに放って帰るわけにもいかないだろう。そう思った伊吹は、とりあえず男の子を背に負ぶつて、谷の出口を探すことにした。

普段なら子どもを背負うなど頼まれてもごめんのだが、なぜか疲れているはずの今日に限って、いつになく元気で、体力が満ちあふれていた。特に苦もなく、苔の生えた岩場を、伊吹は身軽に歩いて廻った。

幸い、男の子はよくなつてくれた。背中から「あっち」とか「こっち」とか、しきりに行き先に指示を出してくる。初めは伊吹も半信半疑で従っていたのだが、言われるままに歩くうちに、いつの間にか深いその谷を抜けることが出来た。

出たところは熊でも出てきそうな深い森で、伊吹としてもぞつとしなかったが、もう仕方がない。途中からは男の子を背中から下ろして、手を繋いで一緒に歩いた。男の子はこれぐらいの年頃の子とは思えないほど足取りもしっかりしていて、伊吹よりもよほどすたすたと先へ行く。まるで、森の妖精か何かのようだった。

そう、大体この子は誰なのだろう。伊吹は考える。もしかしたらあの化け物の群が、自分と一緒にどこからさらってきた子なのだろうか。電車には乗っていないかったが、どこかの民家でも襲撃して、連れてきたのかも知れない。だとしたら大変なことである。何とかして帰してやらなければならないだろう。

そう思って、伊吹は歩きながら尋ねてみる。

「……なあ、お前は何という名前なのだ？」

すると男の子は、伊吹の顔をその濁りのない澄み切った眼でじっと見た。それから、こう答えた。

「すう」

「……？」

伊吹は首を傾げる。後にも数度尋ねてみたが、毎回「すう」と答えるばかりで何のことやら分からない。五、六歳の子ならば普通、自分の名前ぐらいは名乗れるものだろう。伊吹は、彼の服装や姿を見ながら、色々と想像を巡らせた。

男の子はその後、森を熟知しているかのように「あっち」「こっち」を繰り返して、そのままおそらく数時間が過ぎた。日はすっかり高く上り、伊吹もさすがに疲れてくる。もうすっかり汗だくである。

一方、男の子は一向にへたる様子を見せず、時折道ばたの植物や昆虫の類を見つけて拾ってきては、伊吹に見せて喜んでいた。伊吹も虫は嫌いではないので、おかげで多少元気が出た。

「あっち」

何十回目かのその言葉を聞き、汗を頭から吹き出しながら伊吹がその通りに進むと。

そこには、見慣れたアスファルト敷きの国道が走っていた。

2.

その先は伊吹でも分かった。何はともあれ人家に向かわなければならぬと思ひ、道沿いに駅のある方角へ進む。すると、十五分ほどで小さいレストランがあった。

そこに入り、事情を話して電話を貸してもらった。賀茂寺に掛けると、出たのは叔母の紀乃^{きの}だった。普段こんな朝早くに起きていることのない、いい加減な叔母が電話に出たのに驚きながらも伊吹が名乗ると、今度は逆に電話の向こうで叔母がひっくり返る音が聞こえた。どうやら昨晚から伊吹が帰らなくて、寺は大騒ぎになっていたようだった。壁に掛けてある時計を見ると、その時がちょうど午前七時半だった。

叔母が来るまでの間、伊吹はレストランのおばさんが出してくれたお菓子を食べて、男の子と一緒に時間を潰していた。機嫌良くクッキーを口にする男の子の横顔を見ていると、何か懐かしい感情と共に、彼のことを愛

おしく感じた。子ども嫌いの伊吹としては、珍しいことだった。そうして三十分ほど待つと、その叔母の紀乃が車で迎えに来てくれた。

ダイナミックな運転で山中の国道を突っ走る車の中では、紀乃が今の寺の状態についてあれこれ話してくれた。今日は朝から渡辺教授の密葬があり、教授の家族がやって来ているため元々忙しい予定だったのだ。そこへ来て、昨日の夜から伊吹が帰ってこない。そうこうするうち夜半に警察から、事故車両内にお嬢さんの携帯電話が落ちていた、と連絡が入った。

平常そう滅多にないほどの大鉄道事故、しかも何かよく分からない大きな生き物に襲われた形跡が残っていたため、捜査員からは最悪の事態を覚悟しておくように、とまで言われたのである。おまけに教授の葬儀の打ち合わせの途中で、伊吹が渡辺教授の遺体の第一発見者だと分かったものだから、もう大変だった。心配で紅葉はパニックになる、祖父の三弥和尚は激怒する、伊吹の叔父の匠雄和尚と叔母の紀乃は、念のために伊吹の母親に連絡する、など一家九人が一晩中眠りもせずに、大わらわだったらしい。

「でもにえー。お姉ちゃん、つまりいぶきちゃんのお母さんに電話したらさー、伊吹はたまにふらつと出て行って帰ってこないことがあるから、そんな心配しないでもいいんじゃないかしら、とかいい加減なこと言ってるねー。なんかまた仕事のしすぎでろくに寝てないみたいだったけど。だから、あたしはそこまで心配してはいなかったんだけどねー」

対向車線のトラックと衝突しかかりながら、紀乃はのんびりとした口調でそう話した。後部座席で男の子と並んで座っていた伊吹は、ばつの悪い思いをする。心配したのなんだのと言われても、自分の意思でやったことではないのだからどうすることも出来ない。

紀乃は続けてこう言った。

「ま、そうゆう訳だからー。帰ってお葬式終わったら、覚悟しといた方がいいと思うよう。ふふん」

年若い垂れ眼の叔母は振り返ると、伊吹に向かってニッと嬉しそうに笑った。

「……というわけで、家までたどり着くことが出来た。以上」

伊吹はそう言って、昨日列車に乗ったとき失踪した後の一通りの説明を終えた。そして、目の前で座卓を囲んで並ぶ、八人の家族の姿を見た。

伊吹から見て正面には、祖父である住職の尾津野三弥和尚が重い表情で座っている。左側には祖母の翠、義叔母の梨音、叔母の紀乃が並び、右側には叔父の匠雄和尚、従姉妹のみわ、ほたる、そしてすぐ側には紅葉が腰を下ろしていた。お手伝いの祐理名さんは洗い物をしていて、ここにはいない。曾祖母は今日も体調が優れないのか、離れの自室で休んでいるようだった。

伊吹の背後では、あの男の子が辺りをきよろきよろと見回しながら、一人嬉しそうに自分の假面をいじって遊んでいる。渡辺教授の葬儀もつつがなく終わり、今は午後三時を過ぎた頃だった。伊吹一人で警察への簡単な説明も済ませ、細かい聴取は明日以降ゆっくり休んでから、ということになったのである。

「……それで、何だ」

最初に低い声で口を開いたのは、祖父の三弥和尚だった。伊吹は眉を顰める。

「なんだとは何だ。一通り話したから、言うことはもうない、という意味だが」

「そういうことを言ってるんじゃない！」

癩癩を起こした三弥は、座卓を拳で叩いた。大きな音が鳴り、男の子がびくりと身をすくめる。

「まず最初に言うべきことがあるだろう！ こっちは昨日から心配し通しだったんだぞ！ 事件に巻き込まれたかと思ったら列車に乗って事故に遭う、姿をくまらず、何があつたのかと訊いたら、熊にさらわれたとかなんとか」

「事実なんだから仕方ないだろう」

伊吹は目をそらし、ふて腐れる。謎の化け物にさらわれた、ということころは、警察にも家族にも伏せておいた。実際伊吹としても、あまり話そうという気にはなれない。そもそもあんなことが現実起こったとは、もう思えないというのが正直なところである。

昨日の列車内での出来事も、列車の事故に巻き込まれて見た夢か幻覚、

朝見かけた化け物の遺骸も、起き抜けに見た錯覚ではないか。すでにそんな気が始めていた。第一、昨日負ったはずの傷はどこにも残っていないのだから。これも教授の家の庭から連続している、妄想の類なのかも知れない。

幸い警察の聴取では、先方の刑事から「熊に襲われたんだよね？」と先手を打って訊かれたため、はいそうです、と淀みなく答えることが出来た。後はそれを押し通しているのである。「事実とか事実じゃないとか、そういうことを言いたいんじゃない！」

しかし三弥は更に声を荒げる。

「一言まず、心配を掛けて悪かった、と謝りなさい、と言つとるんだ！」

「……別に私が心配してくれと頼んだ訳じゃ」

「なにおう」

伊吹が口を尖らせると、青筋を立てた三弥が腰を浮かせる。

すると、その隣に座っていた匠雄が苦笑気味に父親をいさめた。耳に付けたシルヴァーのピアスが揺れている。

「まーまーま。オヤジ落ち着けてよ」

匠雄はこれでも三十路半ばの立派な僧侶であるが、眉も薄く、ピアスも耳と唇に付け、仕事でないときには迷彩柄の服ばかりを身につけているという、なかなか特徴的な人物だった。

耳に付けたイヤフォンから、ドラムのスラッシュ音やラップのベース音が漏れているのをよく伊吹は耳にするし、風呂上がりに裸の肩口にハート型の刺青が入っているのも見かけた。以前など、法事へ出向くのに一〇〇〇ccのバイクに乗っていいこうとして、三弥に叱られていたこともある。匠雄和尚は続けてこう言った。

「考えてもみろって。教授の事件の方だって鉄道事故の方だって、デコッパチが自分から何かやったわけじゃねえんだからよ。それで責めるのはアンマリじゃね？」

「誰がデコッパチだ」

伊吹はムツとする。三月に最初に出会ったときから、匠雄は伊吹のことをデコッパチ呼ばわりして笑ってくるのである。

それを聞いて今度は、叔母の紀乃が口を挟んだ。朝が早かったせいとか、

まだ日も高いのに彼女は眠たげな顔をしている。もしかしたらさっきまで、昼寝でもしていたのかも知れない。

「しょーしょー。不可抗力なんだから。今一番気にするべきなのはあゝ……どつちかってゆくと、その子のことじゃないの？」

紀乃はそう言って、男の子の方に目をやった。それに合わせて家族全員が、伊吹の背後に目をやる。男の子は突然注目されて驚いたのか、真ん丸な目を更に丸くして、そんな眼差しを受け止めていた。手にはまだ、例の假面がある。短刀は危ないのでさつき没収したのだが、此方は手放そうとしなかったのである。

紅葉がいそいと近寄っていくと、男の子に話しかけた。

「なーボク。お名前なんて言うの？」

「すう」

「わー、すうくんと言うんやー！ めっちゃカワイイやーん！」

そう言って紅葉は一人はしゃいで、すうくんの小さな手を取り喜んでいく。安直に命名された当のすうくんは、きよとんとして小首を傾げていた。紀乃が伊吹に尋ねる。

「この子、その山奥で見つけたんでしょ？」

「ああ」

「一緒に電車に乗ってたの？ 一緒にその大熊にさらわれたのかなあ」

「……いや、電車に乗っていたのは、私一人だったと思うが」

伊吹は口籠もる。どう話したらいいものか分からなかった。

あんな場所にたった一人で眠っていた子なのだ。本当に、ただの普通の子だとは思えない。おまけに森の中も悠々と歩き回る勘の良さ、奇妙な服装、手放そうとしない奇怪な假面を見ていると、それこそ先程考えたように、森の妖精ではないかという気もする。ただ伊吹としては、そんな夢見がちな想像をする趣味はなかったので、冗談半分でも言葉にする気にはなれなかった。

しかし、変わった子だった。伊吹はこの子の顔を見てみると、どこか懐かしいような心地に駆られる。他人にそう感じることはない、親しみを覚えていた。もし自分に子どもがいたら、こんな気持ちになるのかも知れない。とにかく、大切にしてやらねばならない気がするのだ。

一方当のすうくんは、大人たちの顔を見回しながら、しきりに不思議がっていた。

「でもさ、この子、すごく変わった服着てるよ」

身を乗り出して唐突にそう言ったのは、伊吹の従姉妹のみわである。

みわは匠雄と梨音の娘であり、最近十四歳になったばかりで、伊吹とも仲良くしていた。母親に似てなかなかの美人ではあるが、少々小生意気な性格で、何にでもすぐ口を突っ込んでくる。一方、その隣で小さくなつて座っている小学五年の妹のほたるは、姉の傍らに寄り添ってびくびくしながら、周りの大人たちの表情を伺っていた。

みわはくりくりとイタズラっぽい眼を動かして、更に続けた。

「よくゲームとかに出てくる精霊みたいじゃん。なんかさ、魔法とか使つて伊吹お姉ちゃんを熊から助けたりしたんじゃない？　それで、疲れて倒れちゃってたんだったりして」

「この忙しいときに下らんことを言うな！　まったく」

嬉しそうに早口で喋るみわを、三弥が一喝する。母親の梨音がすぐさまみわの頭を軽く叩いて、腕を引くと元の場所に座らせた。梨音は先程から黙ったままで、神経質そうに辺りの雰囲気や家族の表情を伺っていた。これはいつものことである。

しまいに三弥が、不機嫌そうにこう言った。

「何にせよ伊吹。どこの子か分からんまま、だらだらとここに置いておくわけにもいかん。親御さんも心配しとるだろうし。お前がどこの子か知らんのなら、さっさと警察へ連れて行って、預かってもらうしかないだろう。このまま勝手にうちに置いておいたら、誘拐犯扱いされるのはこっちなんだぞ」

それは確かにその通りであるため、伊吹としても反論のしようがなかった。もしもすうくんを連れてきたのが自分でなければ、伊吹も、さっさと警察へ渡すべきだ、と言つてあっさり済ませていたに違いない。しかし、どうにもこの子の場合、そう簡単に突き放して別れてしまう気には、伊吹としてはなれなかった。

伊吹は振り返ると、改めてその男の子、すうくんの顔を見た。

黒曜石のように澄んだ綺麗な眼で、彼は伊吹のこゝろを見つめ返していた。

何故なのかは分からないけれど――。

伊吹は、このまま別れてはならない、と思った。
その時だった。

「……なんや。何があつたんや」

そんなしわがれた声と共に、居間の障子が開く。

そして廊下から、祐理名さんに付き添われた、今年で九十三になる曾祖母のあさ香が入ってきた。

「お母さん。大丈夫なん？」

普段は沈着な祖母の翠が、高い声を出して腰を浮かせる。それをあさ香は片手で制した。

「ええ、ええ。大丈夫や。今日はなんや、調子がええ。祐理名さん、そこへ座らしてくれ」

そう言つてあさ香は、三弥が座っていた上座を指した。

三弥が慌てて隅へ退くと、ゆっくりとあさ香はそこへ腰を下ろした。それからざろりと、三弥の方を見た。

「ほんで、弥三郎さん。何があつたんや。伊吹に何があつた」

困惑した様子の三弥は、いささか口籠もり気味に、あさ香の質問に答えた。弥三郎、というのは、三弥の本名である。

「いえ、お義母さん。昨日の晩に黙って出て行つたと思つたら、悪かつたとも言わずに帰つてきたんですよ。叱つてやつてもろくに反省もせずには……」

「ああほうかほうか、ええ、ええ。帰つてきたんやつたら何でもええ」

訊いておきながら三弥をあつさりあしらうと、あさ香は今度は、伊吹の方へ向き直る。

「怪我はしてないんやな、伊吹」

「……ああ」

「ほんならええ。今度から気いつけ。ん。ほんで、なんや。ほんなこと、揉めとつたんか。こんだけ大人がよーけ集まつて」

そう言つて、あさ香は部屋のぐるりを見廻した。

老いたとはいえ力のあるその視線に、皆が自然と目をそらす。娘の翠ですら、息をついて、目を瞑っていた。

やがて、部屋の中で顔を上げたままなのは、すうくん一人だけになった。すうくんは、新しく入ってきた小さな老婆を、不思議そうに眺めていた。すうくんに気づくと、眼を細めたあさ香が、神妙な声で周囲に尋ねた。

「……なんや、あの子は」

「あの子は……伊吹が隠野山から連れ帰ってきた、どこの子か分からん子で」

歯切れ悪く三弥が説明する。

んー、と訝しげにすうくんを見つめていたあさ香であったが、

「ちよっと。こっちへ、連れておいな」

と、紅葉に向かって言った。紅葉は黙って、すうくんの手を引き、曾祖母の元へと連れて行く。

あさ香の真正面に座らされたすうくんは、全くたじろぐことなく、皺だらけの老婆の顔を見つめ返した。あさ香は、すうくんの頬に手を伸ばす。

「ふん……」

震えるその手で、あさ香はすうくんの服や身体、髪をしばらく確かめていた。すうくんはぼかんと口を開けたまま、黙ってじっとしている。あさ香はそのまま、身じろぎもせず考え込んでいた。静まり返った居間の中では誰一人として口を利かず、聞こえるのは外で鳴く、かまびすしい蟬の声ばかりであった。

やがて、あさ香はうん、と納得した顔で頷くと、祐理名さんの手を借りて、腰を上げた。

そして、皆に向かってこう宣言した。

「……この子は、うちで育てなさい」

驚いた家族が、一斉に顔を上げる。一番驚いたのは、伊吹だった。

戸惑った顔の三弥が言った。

「え？ それはお義母さん、どういう……」

「どういうもこういうもないやろ。この子は、この尾津野のうちに育てるんや」

「いやしかし、まずは警察に……」

言葉尻を濁しながらなおもそう言う三弥を、じろりとあさ香は睨め付ける。一応今年で七十三になる当主の三弥は、あっさり黙ってしまった。あ

さ香は言った。

「警察に言いたかつたら好きにしたらええ。黙っとくわけにもいかんやろ。せやけどな、どうせ親なんか、どこからも出てけえへんからな。そんなときは、うちで引き取ることにしなさい。ええな、伊吹」

そこでいきなり名を呼ばれた伊吹は、びくりとして眼を瞬かせた。あさ香は告げる。

「伊吹。あんたが、育てなさい」

「な。なんで、私が……」

「ええな。あんたが自分で責任を持って、育てるんや。この子は、あんたのもんや」

年に似合わないはっきりとした声で、あさ香はそう断言した。それがどういう意味なのか全く分からず、伊吹はただ沈黙するばかりであった。

——私のもの？

言ってみればすうくんは、たまさか森の中で見つけた迷子である。うちで引き取らなければならぬ理由はどこにもない。伊吹としては別れたくない気持ちになり出していたので、祖母のこの言葉は嬉しかったが、しかしどういふことなのだろう、と思った。

以前から曾祖母は時折、こんな奇妙な物言いをする。筋の通らない、理由のはっきりしない厳命である。聞きようによつては惚けてきたのかとも思えるのだが、祖母によれば、若い頃からこうだったのだという。実際普段は人並み以上にしっかりとっていて、勘も鋭い。いまだに家の問題は、最後には曾祖母に諮^{はか}るのが決まりになっていた。だから、曾祖母なりの何か考えがあつてのことなのかも知れない、と伊吹は考える。

けれど、それがどういふものなのかは、伊吹には見当も付かなかつた。

そうして最後にあさ香は、すぐ側に座っているすうくんを静かに眺める。すうくんは少しの間彼女を見つめ返した後、初めて、にっこりと笑つてみせた。邪念のない幼い笑顔だった。小さな白い歯が、口の中に覗く。

ふふ、とあさ香はかすかに笑むと、祐理名さんと連れだって、居間を少しずつと出て行った。

部屋の中には、沈黙だけが残る。

「……まあ、何でもええんやけど」

ふと、ほとんどずつと口を噤んでいた翠が、伊吹に向かって口を開いた。「これだけは、ちゃんと言うとか。確かに伊吹は、心配してくれなんて誰にも頼んでない。せやけどな、心配してくれた人は、あんたのことを気にしてくれてる人や。感謝を込めて、一言謝ってもええんと違うか？ あんたは、頼んでもおらん贈り物をくれる人に、文句を言うんか？」

落ち着いた口調でそう言われて、伊吹はさすがに口籠もった。

筋の通ったことを言われると、弱いのだ。

それから伊吹は顔を上げて、八人の家族に向かって謝った。

「……悪かった。これからは、身勝手な振る舞いはしないようにする。心配を掛けて、済まなかった」

わずかに雰囲気が緩み、家族たちは顔を見合わせ、微笑みを見せた。

3.

夜になり、すうくんも入れた家族十人の大所帯で夕食を摂った。すうくんはせいぜい五歳ぐらいにしか見えないというのになかなかの大食漢で、大人一人分の料理をぺろりと平らげた。曾祖母に言われたとおり、仕方なく伊吹が彼の世話をした。慣れない手つきで鯛の煮付けや卵のスープを食べさせてやると、口の端からぼろぼろとこぼしながらも、すうくんは機嫌良く笑っていた。結局、すうくんを警察へ連れて行き、今後のことについて相談するのは、明日ということになった。

その後は、風呂に入る。尾津野家のような大家族だと、風呂に入るだけでも一苦勞である。幸い湯船は大きいので、一緒に入れる者は出来る限り一度に湯を使うことになっている。誰かが長風呂をしていると後がつかえて大変なことになるので、毎日毎日計画的に順番を決めなければならない。おまけに、家長である三弥や、一応父親である匠雄を先に廻すことになっているため、なおのことややこしかった。

普段伊吹は夜ごと遅くまで本を読んだりネットで調べ物をした後で一人風呂に入るため、これまでは十二時過ぎにぬるくなった湯に浸かって、後は栓を抜いて片付けもしていた。しかし今日からは、すうくんと一緒に入れなければならない。匠雄・梨音夫婦が入った次、八時前には紅葉と共に、

風呂に入る支度を始めた。

「こら、どこへ行くのだ！ 服を脱ぎなさい！」

脱衣所で走り回って逃げるすうくんを裸の伊吹が追いかけて廻しだして、もう十分ほどになる。紅葉は横で笑っているばかりなので、助けにならなかった。すうくんはとにかく逃げ足が速くて、しかも伊吹をからかうのが楽しくて仕方ないようである。

「ああもう！」

そうするうちに伊吹は何とかかんとかすうくんを捕まえると、貫頭衣を脱がしてすっぽんぼんにする。そして紅葉と共に、風呂場へ入っていった。

すうくんが湯桶に入れてやった水で遊んでいる間に、伊吹と紅葉は、二人並んで頭を洗った。ニコニコと機嫌の良さそうな紅葉が話しかけてくる。

「お風呂一緒に入るのも久しぶりやなー、お姉ちゃん」

「ああ」

「いつぶりやろ」

「最後に入ったのはお前がこっちの家で住むことになったあの日だから、私たちが四歳のとき、だ。母さんが入れてくれた。お前は確か、シャンプーが目に染みて泣いていた。私は一人で身体を洗っていた」

「よお憶えとんなー」

「忘れることが出来ないのだ」

「えー、でも……ちよいちよいお姉ちゃん、忘れたとか思い出せないとか言うてるやん。もみじが前に、昔むかしばなし話話したことも、忘れとったし」

「……方便というやつだ」

伊吹は肩をすくめた。何もかも憶えているとなると、便利なことも多いが都合の悪いことも多い。たまにはわざと、忘れたふりをすることもある。

とにかく伊吹は今まで、この記憶力で学んだことの全てを自由にすることが出来たし、そのおかげで勉強について苦労したことはなかった。辛いことがあるとすれば、思い出したくないことでも忘れることが出来ない、というぐらいだろうか。

「お姉ちゃん、そんな憶えがいいなんて全然教えてくれへんだやん」

「面倒くさいのだ。周りの人が私をメモ帳代わりに使ってくるから。それに、ややこしくなったら忘れたふりをした方が手っ取り早い」

「ひどいなー……」

紅葉は口を尖らせて言った。しばらく、二人は黙って手を動かす。伊吹は短髪だが、紅葉は髪が長いので、洗うのに時間がかかる。

「なーお姉ちゃん」

「うん」

「おっぱい大きくなってきた？」

「自分の胸に訊きなさい」

伊吹は即答して嘆息した。一卵性双生児なのだからわざわざ尋ねるまでもない。

シャワーを浴びて頭の泡を流すと、伊吹はちらりと隣の紅葉を見た。鏡に映っているかのように自分と同じ姿がそこにある、はずだった。もちろん今は眼鏡を外しているのとはつきりとは見えないのだけれど（そういえば明日は眼鏡の修理にも行かなければならない）、湯気の向こうにぼんやりと座っている紅葉の姿態は、どうも自分よりも、色っぽく見えて仕方なかった。

紅葉の方が髪が長いからかも知れない。あるいは、しとやかな振る舞いに慣れているからかも知れない。けれど、自分と同じように細身で色白で、しなやかな体つきをした紅葉は、普段見るよりもよほど綺麗に、色があるように見えた。少しウェーブのかかった黒髪を前に垂らして、リンスを馴染ませている。先程あは言ったものの、以前と比べてずいぶん女性的なスタイルになってきている気がする。

いや——。

伊吹は思う。

ひょっとしたら、自分も、同じように変わってきているのかも知れない。自分では分からないだけで、自分も紅葉のように、色っぽくなってきているのかも知れない。

そう思っればらくの間、伊吹は手の動きを止めて、ぼんやりとしていた。

「どしたんお姉ちゃん、人のことじろじろ見て。いややわー」

いつの間にか頭を洗い終わった紅葉が伊吹の視線に気づいて、無邪気に笑ってみせた。紅葉は伊吹と違って目がいいので、よく見えるのだろう。

その笑い顔は、二人が別々に育てられるようになった四歳の頃から、大して変わっていないかった。

続いて伊吹は、遊んでいるすうくんを連れてきて、身体を洗ってやることにする。例によってすぐに他のことに興味が移ってしまうらしく、すうくんは一向にじっとしてくれない。

伊吹は前に座らせたすうくんを、足を使って股の間に挟み込むようにすると、一生懸命にその細い腕や細い足、なめらかな首や丸いお腹まで洗ってやった。泡の付いたタオルで小さなおちんちんを洗ってやると、すうくんはくすぐったがってけらけらと笑った。伊吹は何となく、顔を赤らめた。

「お姉ちゃん、もみじ先出るなー」

さっさと湯船に浸かって伊吹の苦闘を楽しそうに後ろから眺めていた紅葉だったが、そう言うのと湯から上がった。答える余裕もないまま、伊吹は頷く。

紅葉は伊吹の側をタオルで前を隠して通るとき、くすりと笑みを浮かべてこう言った。

「なんか、意外やなー」

「……何がだ」

「お姉ちゃんがそんな一所懸命、ちっちゃい子のお世話するなんて、思わなんだもん。じきにイヤや、めんどくさい、て言うんちやうかと思て」

「……」

伊吹は何も答えず、お湯をすうくんの全身にざぱりと掛けた。紅葉は風呂場から出て行った。

そう言われても、伊吹自身も不思議に感じていたのだから応えようがない。普段なら、理屈の通じない幼い子どもは苦手なはずだった。それなのにこの子は、護ってやらなければならない気が強くするのだ。理由は自分でも、よく分からない。

伊吹は深くため息をつくとき、また逃げ出そうとするすうくんを押さえて、今度はシャンプーを取り出した。液を手に出して、すうくんの髪の毛を洗う。すうくんは年の割にとても髪の毛が多く、しかも長くて、癖があった。手を動かしていても、指に髪の毛が絡まったりして、なかなか上手く洗えない。これは気持ちがいいのか、すうくんは大人しくしていた。

「痛ッ！」

ふいに掌にちくりと鋭い痛みを覚えて、伊吹は声を上げた。不思議そうにすうくんが振り向く。伊吹も一体、何が手に刺さったのか分からず、首を傾げた。何か硬くて尖ったものが、手を擦っていった気がする。訝しみながら、伊吹はすうくんの髪の毛の中をまさぐった。

そして、見つけた。

「……」

すうくんの頭から左右に一カ所ずつ、人差し指一本分ほどの間を空けて、頭皮から小さな尖った骨のようなものが、突き出ていた。

これが何を意味するのかと、伊吹は沈黙する。

すると、すうくんは振り返って、嬉しそうににっこりと笑った。

異様に鋭い犬歯が見えた。